

論文の内容の要旨

論文題目

「バリ島における多文化共生に関する考察—ヒンドゥーマジョリティとイスラームマイノリティの共存関係—」

学位申請者 東海林恵子

キーワード：ヒンドゥー、イスラーム、多様性、多文化共生、アイデンティティ、自己と他者

本論文はインドネシア、バリ島における多文化共生—ヒンドゥーとイスラームの共存—とはいかなるものかを解き明かし、最終的にはバリヒンドゥーたちの自己と他者の捉え方がいかなるものか、そして彼らのアイデンティティとは一体どのようなものなのか分析するものである。

世界最大のイスラーム人口を有するインドネシア共和国において、バリ島は唯一ヒンドゥー教が多数派を占め「バリヒンドゥーのバリ人」というイメージで捉えられることが多い。しかし、実際には古くからバリ社会に根を下ろしたムスリムの人びとが存在する。あるいは近年においてもジャワやそれ以外の島などから労働目的で多くのムスリムが移住している。このように、宗教的に異なる他者がマイノリティとして存在するため、国内外において多様性・多文化のバリ島と認識されることが多く、また実際にバリに住む人びとも自らをそのように意識していることは現地に住む人々の話を聞いても確認できる。では、その共存とは、あるいは多様性とはどのようなものであるのだろうか。実際に異なる他者、異なる民族、宗教が共存関係にある社会であるのならば、互いがどのように異なる他者を捉え、また自らのアイデンティティを構築しているのだろうか。いかなる背景の元、どのような概念や行動実践によって現実のものになっているのか、深く広く考察する必要がある。

バリ島の文化や伝統、観光に関する考察はこれまで多数議論されてきた。特にバリ島の文化は、観光と切り離せない関係にあることが指摘されてきた。また、多数の研究でバリ島は外部の人びとを受け入れることで自己の伝統と文化を意識し、その都度再創造を重ねてきたと報告されている。しかし、外部要因を受け入れ着々と変化と創造を重ねてきたという側面のみに着目しても、バリの文化特有の民族的、文化的、宗教的な多様性を理解したことにはならない。

山下（1996：7）は『純粋な伝統文化』など虚構でしかない、ときわめて踏み込んだ主張をしており、また川口（2017：142）は、伝統に関して、もし本当に昔から変わらず

に受け継がれているものがあるのならば、当事者たちにとってそれはあまりにも当たり前で「これが伝統だ」などと意識することも声高に主張することもないものだ、と言及している。これらの主張には、確かに見るべきものがある。

一般的に言われているとおり異文化を鏡に自文化の姿を知るのである。つまり、他者や外部の目を意識しなければ、自分たちの伝統と文化が何であるかが意識されることもないし、保存すべきとの意識が働かないままでなされる人々の実践は、時間の経過とともにその姿を徐々に変えていくものである。バリの人々にとってあまりに当たり前の事柄であればあるほど「これが伝統だ」と意識されることもない。本論文が着目するのは、バリに移り住んだムスリムの人々によってバリの文化と伝統が変化と創造を重ね、現在のように多様性・多文化性を特徴とするものに昇華しているという側面である。したがって、本論文では、ムスリムの視点から見たバリを踏まえつつ、ムスリムとヒンドゥーが共生することで生成してきたバリの多文化的な伝統を多角的に理解することを試みる。

本論文は二部構成となっている。バリ島の現実社会の構成過程や要素、また自己と他者をどのように捉えているかを分析するにあたり、第一部は、バリに古くから住むバリ人ムスリム（以下、バリムスリム）のパースペクティブからバリ社会を俯瞰する。そして第二部では反対に、バリヒンドゥーのパースペクティブから多文化共生社会現実の解明や彼らがいかにして他者を捉え、また自らのアイデンティティを構築しているのか分析を行う。それぞれの視点で、様々な方向から両者の関係とバリにおける共生社会のあり方や自己と他者の関係に関し、光を当て分析していく。

まず、第一部（第1章および第2章）では、16世紀初頭にジャワや外島から移民としてやってきたムスリムがいかなる方法でイスラーム教徒としてのアイデンティティを保ちつつもバリ社会を構成する「バリ人」として生かされているのかということを論じる。その際、バリムスリムの象徴とも言えるバリにあるイスラーム聖人の墓を俎上に載せ考察する。バリ島には、イスラーム聖人の墓が点在しており、バリムスリムにとって重要な役割をなしている。イスラーム聖人の墓、及び墓参り（聖墓巡礼）が両者にとっていかなる意味をもつか、とりわけムスリムとヒンドゥーの異教徒関係においてどのような意味と機能を持つかを論じる（第1章）。また、バリイスラーム聖人をめぐる聖人譚に注目し、そこから現代バリ社会に生きるバリムスリムたちの社会的立場と彼らの自己認識についてナラティブ分析の手法によって読み解いていき、ヒンドゥー社会で生きる現代のバリムスリムのアイデンティティに迫る（第2章）。

次に第二部（第3章および第4章）では、ワリピトゥ聖廟の巡礼客の受容とそれの対比としてシャリア観光客の拒絶、排外といったバリヒンドゥー社会におけるイスラーム要素の受け入れと排除の構図と背景にあるものについて明らかし、バリ観光について論じる（第3章）。そして最後に、社会生活におけるイスラーム教徒とヒンドゥー教徒の関係が、いかなる思想および社会的実践のもとで共存し、良好な関係が構築さ

れてきたかということ、人々の社会生活に組み込まれたバリ独自の伝統に基づいた行動、価値観、規範、倫理、信念、慣習法などから具体的事例のもと考察する（第4章）。

ヒンドゥーマジョリティとイスラームマイノリティが複雑に交錯するバリの多様性を明らかにし、課題、ジレンマを明確にすることは、バリならずインドネシア全体に見ても重要な観点であるといえるだろう。また、今までになかった、異なる宗教のバリ人「バリムスリム」という視点と「バリヒンドゥー」というそれぞれの視点から問題点を明らかにすることは、バリ島がヒンドゥー教と同義ではないことを改めて問いただし、宗教やアイデンティティのありかたを捉え直すことができる大きな意義をもつだろう。さらに、こうした宗教的、文化的差異にともなう課題やジレンマを抱えつつ、それでもなお多様な人々の共生を可能にするバリ島の伝統文化の根底にあるものに迫ることができれば、従来のバリ研究に多少とも新たな知見を本論文が追加することになるだろう。